　© 不許複製禁転載

［A］水稲耕作の伝来－テキストP3対応－

縄文時代を振り返ってみると，温暖化が始まったことによって3つの大きな変化が生まれたよね。

1つ目は，温暖化によって大型動物が死に絶えて，ニホンシカ・イノシシなどの中小動物が増加したこと。そして，それら動きの速い中小動物を捕獲するために弓矢が発明され，その矢じりには黒曜石などを原料とした石鏃が使われたりしたよね(狩猟)。

2つ目は，温暖化によって落葉広葉樹林・針葉樹林といった木の実・ドングリなどが実る植物が増加したこと。そして，それらを採取して，アク抜き・煮沸するための縄文土器や，すりつぶすための石皿・すり石が使用されるようになったよね(採集)。

3つ目は，温暖化によって氷が溶け，海面が上昇したことで日本列島が形成され，入り江などが増加したこと。こうした海で魚を捕獲するために，釣針や銛(もり)・やすなどの骨角器が使用されるようになり，魚や貝などの食べたゴミを捨てる貝塚も登場したよね(漁労)。

そして，狩猟・採集・漁労経済によって，生活が安定するようになったため，青森県の三内丸山遺跡などにみられるように，竪穴住居で生活する定住生活が始まったんだったよね。

ただ，旧石器時代に比べて食生活が豊かになったとはいえ，肉・魚などは腐ってしまうし，ドングリ・木の実などは採取量に限界がある。そのため，縄文時代はまだ食料を保存したり，生産したりすることはできなかったんだ。でも，縄文時代晩期に水稲耕作の技術が中国大陸から九州北部に伝わり，弥生時代には東北地方まで広まっていった。これにより，縄文時代の食料採取の段階から，弥生時代の食料生産の段階へと変化していくんだ。

＜時代の名称＞

おそらく受験生にとって疑問に思うところが，時代の名称ではないかと思う。例えば，「旧石器時代」のことを「先土器時代」や「無土器時代」という別名で呼んだり，「新石器時代」に関しても「縄文時代」という別名が存在する。同じように，「弥生時代」にも実は「青銅器・鉄器時代」という別名が存在するんだ。これらの名称がいろいろあると混乱することもあると思うので，少し説明しておこう。そもそも“世界史”では，以下のように時代を区分している。

旧石器時代	新石器時代	青銅器時代・鉄器時代
(打製石器を使用した時代)	(磨製石器を使用した時代)	(青銅・鉄を使用した時代)

“世界史”の視点で見た場合には，「旧石器時代(きゅうせっきじだい)」→「新石器時代(しんせっきじだい)」→「青銅器・鉄器時代」と時代が進んでいく。それならば，日本史でもこのような“世界史”的な名称を用いて時代を表せばいいんだけど，日本にはある問題点があった。それは“1946年に相沢忠洋(あいざわただひろ)が群馬県(ぐんまけん)で岩宿遺跡(いわじゅくいせき)を発見するまで，日本には旧石器時代は存在しなかったと考えられていた”ということ。だから，戦前まで日本の歴史は「新石器時代」から始まると考えられていた。その「新石器時代」において，日本では縄目の文様がついた土器が多く発見されていたため，日本では独自に「縄文時代(じょうもんじだい)」と呼んでいたんだ(これに対し，「縄文時代」の前の「旧石器時代」では土器が発見されていないため，土器が無い時代や土器が誕生する前の時代ということで，「無土器時代(むどきじだい)」や「先土器時代(せんどきじだい)」と呼んでいた)。

また，“世界史”の青銅器・鉄器時代にあたる紀元前4世紀頃になると(2003年，放射性炭素14年代法(ほうしゃせいたんそ14ねんだいほう)によって，弥生時代は紀元前10世紀とする説が出された)，日本では縄文土器とは特徴の違う土器が作られるようになる。その縄文土器とは特徴が異なる土器が，1884年に東京都(とうきょうと)文京区(ぶんきょうく)の本郷(ほんごう)弥生町(やよいちょう)の向ヶ丘貝塚(むこうがおかかいづか)で初めて見つかったことから，その土器を弥生土器(やよいどき)と呼ぶようになったんだ。そして，その弥生土器を使用していた時代区分を日本では「弥生時代(やよいじだい)」と呼ぶわけだ。

つまり，「旧石器時代」→「新石器時代」→「青銅器・鉄器時代」が“世界史”的な時代区分であるのに対し，「先土器時代・無土器時代」→「縄文時代」→「弥生時代」は，“日本史”的な時代区分であるわけだ。

旧石器時代	新石器時代	青銅器・鉄器時代
(世界史的な時代区分)	(世界史的な時代区分)	(世界史的な時代区分)
⇩	⇩	⇩
無土器・先土器時代	縄文時代	弥生時代
(日本史的な時代区分)	(日本史的な時代区分)	(日本史的な時代区分)

じゃあ，この大陸から伝わってきた水稲耕作という技術は，どういうルートで日本に伝わってきたんだろう。

もともと，稲作の起源はインドのアッサムや中国の雲南だと言われてきたけど，現在では**長江**(**揚子江**)下流域がその起源と言われている。でも，インドのイネの品種は，タイ米のようなインディカ種と呼ばれる粒が長くて暑い地方に多いタイプ。だから，日本米のような粒が短くて寒さにも強い**ジャポニカ種**とは関係がないよね。ゆえに，中国の**長江**(**揚子江**)下流域から九州北部へと伝わったと考えられているんだ。

なお，稲作は朝鮮半島を経由して九州北部へ伝わったという説が以前は一般的だったけど，現在それは否定されている。水田跡の遺跡からは**プラント・オパール**と呼ばれるイネの化石が見つかったりするんだけど，そのイネの DNA 分析をしてみたところ，日本の品種と中国の品種には DNA のつながりがあるのに対して，日本の品種と朝鮮の品種には DNA のつながりが一切みられなかったんだ。だから，稲作は中国から直接日本に伝えられた，ということになるわけだ。

〔稲作の伝来ルート〕

まあ，稲作の伝来ルートに関しては放っておいて，とりあえず水稲耕作の技術が最初に伝わってくる地域は九州北部ということになる。その九州北部で水田跡だとか炭化米(焼けて灰になった米)などが見つかった縄文時代晩期の遺跡が，**福岡県**の**板付遺跡**と**佐賀県**の**菜畑遺跡**だ。ただし，この 2 つは縄文時代晩期の遺跡であることに気をつけてね。つまり，弥生時代ではなくて，縄文時代晩期には既に水稲耕作が行われていたんだ。

＜水田遺構の覚え方＞
「濃厚(農耕)なサイフ」
→な(菜畑遺跡)サ(佐賀県)
イ(板付遺跡)フ(福岡県)

あくまでも「弥生土器を使用するようになった時代を弥生時代と言う」のであって，「弥生時代に水稲耕作が伝わった」わけじゃない。正確には，縄文時代晩期に水稲耕作が伝わると，今までの厚手で脆い黒褐色の縄文土器では，米炊きには適さない。そのため，徐々に薄手で硬い赤褐色の弥生土器に変わっていくんだ。そして，その弥生土器が使用されるようになった時代を，ようやく弥生時代と呼ぶわけだ。

そして，九州北部に伝わった稲作は，わずか 100 年間の早い期間で東北地方まで伝わっていく。ゆえに，本州最北端の水田遺構として，弥生前期にあたる**青森県**の**砂沢遺跡**と，弥生中期にあたる**青森県**の**垂柳遺跡**が問われるんだ。この 2 つは東北地方まで稲作が伝わったという確固たる証拠になるよね。そして，最後の弥生後期にあたる**静岡県**の**登呂遺跡**は，太平洋戦争中の 1943 年に発見され，戦後の 1947 年から行われた発掘調査で，初めて水田跡などが見つかった遺跡。なお，僕のテキストでは，これら遺跡が弥生前期・中期・後期と時系列に並んでおり，「砂沢(サ行)・垂柳(タ行のタ)・登呂遺跡(タ行のト)」と五十音順で整理できるので，それを有効活用してほしい。

＜原始農耕＞

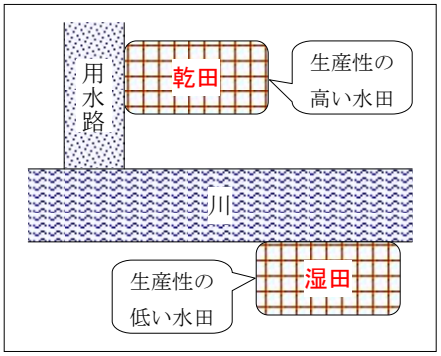
水稲耕作の技術が中国大陸から伝わったと説明したけど，水稲耕作というものが何なのかイマイチわかっていない人も多い。普通，イネは田んぼで栽培するもの。こうした水田でイネを栽培することを水稲耕作というけど，畑でイネを栽培する陸稲耕作というパターンもあるんだ。

そして，水田でイネを栽培する水稲耕作の技術が中国大陸から伝わる以前の縄文時代にも，イネを畑で栽培する陸稲耕作が行われていたようなんだ。例えば，縄文時代前期～中期の岡山県朝寝鼻貝塚からは，縄文時代前期～中期の**プラント・オパール**(イネの化石)が見つかっている。ここから，縄文時代にイネを畑で栽培する陸稲耕作が行われていたんじゃないか，と考えられるわけだ。そもそも，縄文時代には，ヒョウタン・マメなどの植物を栽培していたので，畑で稲作をしていてもおかしくはないよね。また，縄文時代中期の**長野県**の**尖石遺跡**では，地理的に生計が難しいことから，雑穀の焼畑農耕が行われていた可能性があるとされている。このような縄文時代に畑で作物を耕していたことを原始農耕というんだ。

上記のように，**九州**から**東北地方**までに栄えた農耕を中心とした文化を弥生時代と呼ぶんだけど，ここで気をつけてほしいのは全国で稲作が行われていたわけではないこと。沖縄・北海道では稲作が行われておらず，縄文時代と同じ狩猟・採集・漁労経済が続いていたんだ。稲作の伝来ルートから外れる沖縄では**貝塚文化**(**南島文化**)と呼ばれる狩猟・採集・漁労文化が 12 世紀頃まで続いていた。まあ，沖縄だったら地理的にも貝塚がいっぱいあるのは想像しやすいよね。また，寒冷で稲作には適さず，サケ・マスなど魚介類が豊富な北海道でも**続縄文文化**という狩猟・採集・漁労文化が続いていたんだ。ただし，7 世紀以降は擦文土器という別の文様の土器に変わっていくので(擦文土器は縄文土器と土師器の影響を受けた櫛の歯のような文様をもつ土器)，7 世紀以降は**擦文文化**と呼ばれる(北海道北部のオホーツク海沿岸では，オホーツク式土器という異質なものが用いられていたので，**オホーツク文化**という)。

［B］弥生時代の農業－テキスト P3 対応－

弥生時代の農業については，イメージも湧きにくいし，あんまり面白くない。なので，ここは自分が農作業を行うことになったと想像して読んでいくと，理解しやすくなる(小学生の頃に体験学習で田植えをしたことがある生徒はイメージしやすいかもね)。



まず，稲を育てるためには，畑で栽培する陸稲耕作よりも，田んぼ(水田)で栽培する水稲耕作の方が生産力は高いので，まずは水田を作らなきゃならない。

弥生前期には，川のすぐ近くの低湿地に**湿田**という水田がつくられたんだけど，これには少し問題点がある。まず，土が 1 年中湿っているから，水を補給する必要はないんだけど，排水施設が必要になる。さらに，土がずっと湿っているから，稲に酸素が届きにくいし，微生物が少ないため，生産力は低くなってしまうんだ。

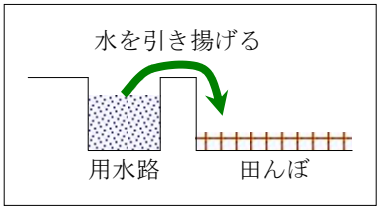
そのため，弥生後期になると，川から少し離れていて，微生物が多く，土が乾いている**乾田**が増えていく。ただし，川から離れているため，用水路などを設けた灌漑施設が必要になるんだ。つまり，土木作業をして川・池などからつながる用水路を作って，その用水路から田んぼに水を引いてあげなければいけないってこと(このような用水路を整えて，春の田植え前に田んぼに水を入れて，秋の収穫が終わったら田んぼから水を取り出す施設を灌漑施設という)。

© 不許複製禁転載

水田とする場所が決まったら，その田んぼを耕さないといけない。ただし，ここで気をつけてほしいのは，弥生前期と弥生後期では使われた農具が違うことだ。弥生前期は，割れにくいカシの木などを用いた木製農具を使っていたんだけど(これらの木製農具をつくるためには，木材伐採用の**太型蛤刃石斧**や，木材加工用の扁平片刃石斧などの磨製石器が用いられた)，先っちょが割れちゃったりするんだ。だから，弥生後期になると鉄製農具が使われるようになっていく。例えば，木鍬・木鋤から，弥生後期には刃先だけ鉄の鉄鍬・鉄鋤に代わったようにね。こうした鍬や鋤で田んぼを耕したら，最後は**えぶり**を使って，田んぼを平面にならせばいいだけ。写真の空いてる部分に棒をさせば，野球部などの練習後にグラウンドをならすために使う「とんぼ」みたいになるでしょ？

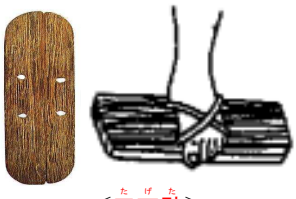
〔えぶり〕

田んぼを耕し終わったら，用水路から水を引き揚げて，田んぼに水を入れてあげる。用水路と田んぼを断面図でみると，右図のようになるので，用水路から田んぼに水を引き揚げることを「揚水」というんだ。「用水」と「揚水」の違いがわかっていない人も多いしね。



そして，その水をはった田んぼにイネを播いていくんだけど，弥生時代には，種籾を直接田んぼにバァーっと適当に播いていく**直播**という方法がとられていたんだ。でも，これだと雨風でイネが倒れたりしてしまうし，生長が悪くなってしまう。なので，**岡山県**の**百間川遺跡**にみられるように，一部の地域ではイネを一本一本田んぼに植えていく田植えも行われていたんだ。なお，このイネを播いたり植えたりする時に，日本で栽培されていたイネの品種が，粒の短い寒冷性の**ジャポニカ種**だったわけだ(インドなどで栽培されていた粒の長い熱帯性のイネはインディカ種という)。

こうした直播をするにしても，田植えをするにしても，イネに肥料を与えるにしても，田んぼの中で作業をしなければならない。でも，ふつうの靴で田んぼに入ると，ズブズブ足がめり込んで動きにくくなっちゃうよね。そこで，右の写真にあるように，ふつうの靴より面積が大きい**田下駄**を使うんだ。これだけの面積であれば，忍者が使う水蜘蛛みたいに，田に足がめりこむのを防ぐことができるからね。


〔田下駄〕

そして，その田下駄の一種として，肥料を踏み込むために用いるのが**大足**。これは，右の絵を見てもらえばわかるけど，田下駄を履いた上で，さらに大足を履いちゃう。そうすると，田下駄よりも面積がさらに大きくなるから，それを利用して肥料を踏み込むわけだ。まあ，ここまで大きいと歩くためのものじゃなくて，何か踏み込むためのものだなってわかるでしょ。なお，肥料が足りなくなって，誰かに肥料をもってきてもらいたい時には，**田舟**で運んでもらうといい。小さな木製のものだから，そこに肥料などを乗っけて運べば効率もいいしね。

〔大足〕

さて，夏が過ぎて秋になったら稲穂が実るので，ようやく待ちに待った収穫の時期だ。でも，弥生時代には，いろいろな品種の稲を栽培しているので，収穫時にまだ実っていないものもある。だから，実った稲穂だけを一つ一つ選んで刈り取らなければいけない。そこで，**石包丁**という磨製石器を使って(穴の部分に紐を通して使う)，稲穂だけを刈り取る**穂首刈り**を行うんだ(意外に「刈」という漢字は書けない)。

〔石包丁〕

ただ，これは結構面倒くさいからね。弥生後期に鉄製農具が使われるようになると，**鉄鎌**を使って根っこから刈り取る**根刈り**にかわっていくんだ。そして，収穫した稲は，ネズミ対策用に床を高くした**高床倉庫**や，竪穴住居の内部に設けられた**貯蔵穴**などに貯蔵しておくわけだ。

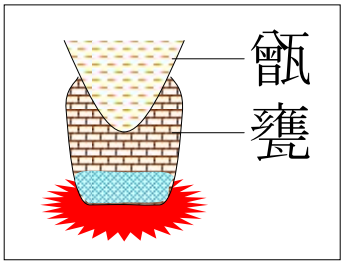
ただ,貯蔵しておく稲は,腐らないように籾殻がついた状態になっているので,このままでは食べられない。だから，籾殻を取り除いて玄米 or 白米の状態にしなきゃいけないんだ(これを脱穀という)。そこで，脱穀用のために使われた農具が木臼(木の臼)と竪杵(棒状の杵)だ。この木臼に種籾を入れて，上から竪杵でつくことによって，籾殻を取り除いて玄米の状態にするわけだ。籾殻は想像以上に固いので，上から棒で叩いたりしなきゃ籾殻は取れないしね。

〔木臼・竪杵〕

脱穀をして玄米にしたら，後は食べるわけだけど，もちろん米を食べるためには炊いたり蒸したりしないとダメだよね。そこで，調理用のために使われたのが弥生土器なんだ。今までの縄文土器は，それほど高い温度で焼かなかったため,黒くて厚手で脆かったけど,容器が厚いと熱が伝わりにくいので調理には適さない。そのため，縄文土器より高温で焼いた薄手で硬い赤褐色の弥生土器が使用されていくわけだ(薄いので熱が伝わりやすく米炊きに向いている)。

〔弥生土器(一番右が高杯)〕

その調理をする際に，煮炊き用に使われたのが甕で，米蒸し用に使れたのが甑なんだけど，これはワンセットで使うんだ。右図のように，甕の中に水を入れて，その下から火を燃やすことで沸かして温めるんだ。そして，その上に甑を置いて蓋をしておけば，蒸気で米を蒸すことができるわけだ。あとは,食べる際には盛り付け用の高杯に盛り付けて,余ったものを保存しておきたい場合は,貯蔵用の壺に貯蔵しておけばいいんだ。



［C］弥生時代の社会(1)－テキスト P3 対応－

弥生時代の特徴といえば水稲耕作だけど，それ以外にも弥生時代特有のものが 5 つある。それが，

(1)日本人の形成・(2)牧畜の始まり・(3)機織り技術の伝来・(4)金属器の使用・(5)墓制の変化

なんだけど，まずは(1)から説明しよう。もともと縄文時代の日本に住んでいたのは，南方系の古モンゴロイドと呼ばれる縄文人系の人々だった。そこに，弥生時代以降に北方系の新モンゴロイドと呼ばれる弥生人系の人々が朝鮮半島経由で渡来してきて，それらが混血を繰り返した結果，現在の日本人が形成されていったんだ(モンゴロイド(蒙古人種)とは東アジアに分布する黄色人種のこと)。

ちなみに，入試では問われないけど，現在の日本人も縄文人系か弥生人系かのどちらかに分けることができるので，自分がどっちのタイプに属するか，以下の特徴から考えてみると面白いかもね。

	古モンゴロイド(南方系)	新モンゴロイド(北方系)
適応	寒冷地適応を経ていない	寒冷地適応を経ている
体型	比較的小柄な体型	背が高くガッチリした体型(体熱を逃さないため)
顔	凹凸が強い(彫りが深い)	凹凸が少ない(彫りが浅い)(体熱を逃さないため)
目	二重まぶたや厚い唇	一重まぶたにみられる蒙古ひだ(目を凍傷から守るため)
耳垢	湿った耳垢	乾いた耳垢(耳の凍結を守るため)
体毛	体毛が多い	体毛が少ない(身体に付着した水滴が凍結しないため)

なお，弥生人の人骨は遺跡から出土すること自体が珍しくて，戦前は特徴があまりわかっていなかったんだ。でも，戦後になって山口県の土井ヶ浜遺跡から高身長・面長の弥生人骨が掘り出されたことで(身体に多くの矢を受けた戦士と思われる人骨も出土した)，低身長・広顔の縄文人とは異なることがわかったんだ。

© 不許複製禁転載

〔紡錘車〕

続いて，(2)ブタの飼育を行うなど牧畜が始まったのも弥生時代からになる。ふつう，世界では新石器時代(日本の縄文時代)から牧畜が始まっているんだけど，日本ではその牧畜の始まりが弥生時代とやや遅れていので，正誤問題で問われることがあるんだ。

さらに，(3)機織り技術が伝えられたのも弥生時代。繊維によりをかけ，錘を利用して糸を紡ぐ紡錘車が大陸から伝えられたんだけど，これは使い方の説明が不可能に近いので，使い方を詳しく知りたい場合は youtube などで見てくれるといい。

そして，最も重要なのは(4)青銅器・鉄器といった金属器の使用だ。金属器には，青銅器・鉄器があるけど，世界史では「石器時代」→「青銅器時代」→「鉄器時代」と区分するんだけど，日本に伝来する頃には青銅器だけでなく鉄器も既に発明されていた。だから，青銅器・鉄器がほぼ同時期に伝来するんだ。農業をするにして戦争をするにしても，鉄などがなければ難しいしね。

でも，青銅器と鉄器を選べるとしたら，農具・武器などにはもちろん強力な鉄を使うよね。そのため，鉄器は実用的な工具・農具・武器として使用され，青銅器は非実用的な祭器・宝器として使用されるようになったので，のちに大型化していく特徴があるんだ(青銅は銅と錫の合金のことだが，立教大学で過去 2 回出題しているので受験予定の者は覚えておくとよい)。

〔銅矛(鉾)の使い方〕

ただし，祭祀的・宗教的な道具として使われた青銅器は，主に 4 種類に分かれている。それが九州北部を中心に出土する銅矛(鉾)・銅戈，瀬戸内地方を中心に出土する平形銅剣，近畿地方を中心に出土する銅鐸なんだ。写真・図を見てもらえばわかるように，銅矛(鉾)は槍みたいに相手に突き刺す武器で，銅戈は相手に引っかける武器。どちらも初めは武器として使用されていたみたいだけど，使用された形跡がないので，実際は祭祀用に使われたみたいだね。同じように，平形銅剣は平べったい形をしている銅剣で，写真を見れば明らかに祭祀用だなってわかるでしょ？

〔銅戈の使い方〕〔平形銅剣〕

そして，最後の銅鐸は，シカを仕留める時の様子など原始絵画が描かれている日本独特のもので，今までは何のために使っていたのか不明だった。でも，2015～2016 年に淡路島の松帆というところで，ひもが付いた「舌」と呼ばれる棒のようなものが，銅鐸と一緒に見つかったんだ(松帆銅鐸と名付けられた)。ここから，銅鐸はひも付きの「舌」を使った音を鳴らすための祭器だということが判明したんだ(時事的なものとして難関私大は気をつけておきたい)。

〔銅鐸〕

〔舌〕

これらの青銅器は，それぞれ出土する地域を正誤問題で変えてくるんだけど，こんなものはゴロで覚えてしまえばいい。ただし，このゴロを覚えるためには，少し設定をきめ細かくしないといけない。

あるところに「法子」という小学生の女の子がいた。読み方は覚醒剤で有名な~~酒井法子~~と同じように，「のりこ」と読む。でも，いかんせん読みづらい名前のため，小学校の先生には読み方がわからなかった。

先生「う～ん，ほうこちゃん…かな？」

法子「先生，私のりこなんですけど!!!!!!」

先生「あっ，ごめんごめん！ちょっとわかりづらくて…」

法子「ひどいです！名前間違える先生なんて最低だと思います！」

先生「…いや，そういうつもりじゃなくて…」

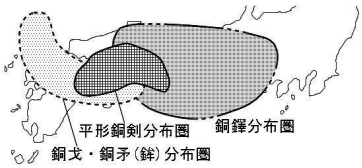
法子「もういいです！私もう今日は帰ります!!!!!!」

こうして，~~のりこ~~ほうこちゃんは家に帰っちゃったんだけど，小学生だと絶対次の日には友達から「ほうこ」「ほうこ」ってからかわれる。そこで，~~のりこ~~ほうこちゃんはイジメ対策として，次の日なぜか家から洗濯機を担いで「フンッ!!フンッ!!フンッ!!」って勇んで登校してきたんだ。

だから，まわりの生徒たちはビックリだ。
生徒「おっ，おい!!みんなやべえぞ，逃げろ!!どけどけっ!!洗濯機担いだほうこがきたぞ!!」

＜各種青銅器の覚え方＞
「どけっ!!洗濯機ほうこがきた!!」

どけ	せ	ん	たく	き	ほうこ	が(か)	きた
(平形)銅剣	瀬戸内		銅鐸	近畿	銅矛	銅戈	北九州



このように，各種の青銅器は特定の地域から出土するという定説が存在する。ところが，そんな定説をぶっ壊してしまうレアケースの遺跡が見つかってしまったんだ。それが，358 本の銅剣・16 本の銅矛・6 個の銅鐸が一緒に出土してしまった島根県の(神庭)荒神谷遺跡だ。この遺跡は，各種の青銅器が特定の地域にしか出土しないという定説を覆すことになったものなので，押さえてもらいたい。

そして，入試では「358 本の銅剣・16 本の銅矛・6 個の銅鐸が一緒に出土した島根県の遺跡は？」と問われてきたりするんだけど，銅剣・銅矛の本数や銅鐸の個数なんかはどうでもいい。実は，この(神庭)荒神谷遺跡のすぐ離れたところの加茂岩倉遺跡(島根県)から，日本最多の 39 個の銅鐸が出土しているんだ。そのため，「青銅器で有名な島根県の遺跡は？」と出題すると，(神庭)荒神谷遺跡でも加茂岩倉遺跡でも正解となってしまう。だから，荒神谷遺跡を出題するためには，「358 本の銅剣・16 本の銅矛・6 個の銅鐸が一緒に出土した」と制限をつける必要が出てきてしまうので，本数や個数などは覚えなくてよいわけだ。まぁ，(神庭)荒神谷遺跡も加茂岩倉遺跡も同じ島根県だから，この島根などの山陰付近に大きな王権とかがあったんじゃないか，とも言われているんだけどね。

［D］弥生時代の社会(2)－テキスト P3 対応－

弥生時代の社会の特徴の(5)が墓制の変化だ。縄文時代には，死霊を恐れて手足を折り曲げて埋葬する屈葬がとられていたけど，弥生時代になると「死」に対する意味がわかってきたようで，手足を伸ばして埋葬する伸展葬がとられるようになる。そして，集落近くの共同墓地に葬るんだけど，君たちだったら，どう埋葬してもらいたい？

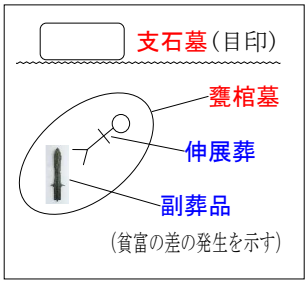
中には土壙墓といって，「棺」に入れずに，地面に掘った穴にそのまま遺体を埋葬することもあるんだけど，さすがにそのまま埋められるのも嫌だよね。そのため，「棺」が作られるようになるんだけど，その「棺」の形式が地域によって異なるんだ。

〔支石墓〕

〔甕棺墓〕

例えば，九州北部では 2 つの甕を合わせた甕棺墓や，自然石の支柱の上に大きな板石を載せた支石墓が登場する。甕棺墓は，「甕」を 2 つ合わせると卵型になるので，その中に遺体を埋葬するもので，支石墓は，「俺ここに埋まっているから，この下は掘らないでね！」っていう目印になるもの。

つまり，図解すると右図のようになるんだけど(テキスト P3 の甕棺墓(写真)の左に図解を書き込んでおくとよい)，一部の甕棺墓の中には，銅剣や銅鏡などの副葬品が入っていることがある。これは何を示しているかというと，水稲耕作の開始によって富を蓄えたものが現れ，その富裕者が自分のすごさをアピールするために埋葬したものと考えられるよね。つまり，弥生時代になると貧富の差が生まれ，身分階級が発生したことがわかるんだ。



〔甕棺墓・支石墓の図解〕

それと，支石墓は朝鮮半島南部の影響を受けたもので(九州北部なので地理的に影響を受けやすい)，福岡県の須玖遺跡では多くの甕棺墓と支石墓が見つかっているんだ。

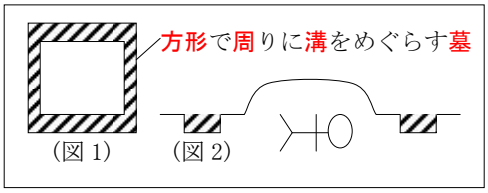
© 不許複製禁転載

一方,西日本では箱式石棺墓,近畿地方では方形周溝墓が多いんだけど，これらは漢字からどういうものかわかると思う。箱式石棺墓は**石**で**箱**型に組み合わせた**棺**の**墓**だし，方形周溝墓は縦 10m 横 10m ほどの正**方形**で，**周**りに**溝**をめぐらした**墓**だからね。

〔箱式石棺墓〕

〔方形周溝墓〕

方形周溝墓は上から見ると，図(1)のように，断面図にすると図(2)のようになっていて,盛り土の下に被葬者が埋葬されている。そして，この盛り土の部分が，時代につれて徐々に大きくわっていき，弥生後期になると，その墓の大きさが飛躍的に大きくなる。



それが，弥生後期の墳丘墓と呼ばれる盛り土をして墓域を区画した墓なんだけど,これは古墳時代の古墳と変わらないレベルの大きさのものまである。例えば，最大級の墳丘墓として知られる岡山県の楯築遺跡(楯築墳丘墓)なんかは，全長 80m ほどもあるので，古墳と比較してもほとんど変わらない大きさ。なお，山陰・北陸地方では，四隅突出型墳丘墓という方形の四隅が突出した形の特殊な墳丘墓が作られていたので,超難関私大を受験予定の者は覚えておくとよい(早稲田大学で 2 回出題)。

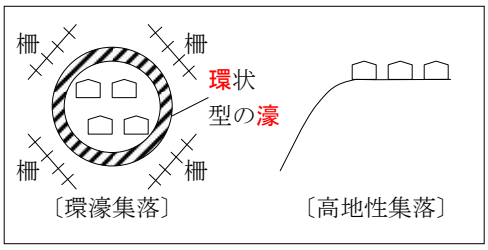
〔墳丘墓〕

じゃあ，古墳と何が違うのか？はっきり言うと，大きさだけだと明確な区別はできなくて，時期の違いで区別するしかないんだ。つまり，弥生時代は紀元前 4 世紀～3 世紀で，古墳時代は 3 世紀末～6・7 世紀なので，3 世紀までのものなら「墳丘墓」，3 世紀後半ないし 4 世紀以降のものは「古墳」と呼ばれるわけだ。だから，墳丘墓は「弥生時代の古墳みたいなもの」と考えるといいね。

弥生時代になると，貧富の差(身分階級)が発生したことは既に述べた。これは，水稲耕作が始まったことで富を蓄積することが可能になったことが背景にある。そして，水稲耕作をするために地域ごとに集落(ムラ)が形成され，その集落(ムラ)を統率する首長(リーダー)が出現していく。

でも，地域によって農業生産力は異なるよね。そのため，別の集落(ムラ)が立地条件が良かったりすると，それをめぐって争いが始まるようになるんだ。つまり，戦争の時代が始まるってこと。ちょうど，この頃には鉄器が伝わっているので，それを武器として使用するようになるからね。

そのため,他の集落(ムラ)に滅ぼされないように,高地性集落や環濠集落などの軍事的・防衛的な施設を整えた集落が登場していくんだ。高地性集落は，その名前からわかるように山頂や丘陵などの高いところに設けられた集落で，香川県の紫雲出山遺跡のように瀬戸内地方を中心にみられるもの。



それに対して，環濠集落は集落(ムラ)の周りを**環**状型の**濠**で取り囲んだ集落のこと。これは九州～関東まで各地にみられるもので，佐賀県の吉野ヶ里遺跡，奈良県の唐古・鍵遺跡，大阪府の池上曽根遺跡，神奈川県の大塚遺跡などが代表的なんだけど，吉野ヶ里遺跡に関してはその重要性も知っておいてほしい。佐賀県吉野ヶ里遺跡は大環濠集落として有名だけど，1986 年に魏志倭人伝に記される邪馬台国の楼観かと思われる物見櫓が発掘されたことで，邪馬台国の九州説の根拠となっている遺跡なんだ。

＜環濠集落の覚え方＞

「吉野(奈良県)から大津(滋賀県)が行けそうね」

吉野	から	大津が	行けそうね
吉野ヶ里	唐古・鍵	大塚	池上曽根